

前回シンポジウムまとめ

シンポジウム「3・11の社会哲学」

小谷 英生（群馬大学）

本シンポジウムでは西山雄二氏、渡名喜庸哲氏、森一郎氏を提題者として迎え、それぞれ「人文学にもとづくカタストロフィの解釈・思考・表象」、「ポスト 3.11 の人間の地位——ハイデガー、アンダース、デュピュイ、ナンシー」、「世代問題の再燃——3.11 以後」と題された報告を行い、その後活発な議論がもたれた。なお、司会は加藤泰史会員が務めた。

西山報告では 3.11 を「通俗的な歴史的時間性を寸断する」経験、一度すべてが崩壊した後に新たに社会が再生する「循環的歴史」の契機と捉えた。そしてこの経験／契機に際して人文学が果たすべき役割とは、カタストロフィのコンテクストを解きほぐし、「人間が再び自然と社会を結び、社会を構築し直すために、人間の物語を再び紡ぎ出す『テクスト』を想像する点にある」としている。

渡名喜報告は同じカタストロフィをテーマとし、ギリシャ語、ルネサンスからバロック詩学にかけての演劇理論、フランス語における類義語などを例示しながら、カタストロフィの「虚構性」を指摘した。カタストロフィとはそれに遭遇した人々が「まるで映画のようだ」と感じるような日常を超えた経験であり、それは——もちろん被害者を冒瀆するわけではないが——美的感性を刺激する（「悲劇の快」「受苦の快」というアポリア）。後に個人的に質問をしたときに渡名喜氏は「3.11 から数年たったいまの状況こそがむしろカタストロフィだ」と仰っていた。「絆」や「日本の復活」を安易に語り、原発事故をすでに過去のものとみなし、それが現実だと思い込んでいる日本人の姿は「まるで映画のよう」なのかもしれない。

最後に森報告では世代を哲学的問題として捉えようという試みである。世代を哲学的問題として捉えるとはすなわち、私たちは現在生きている他者たちのみならず、死者とともに存在している（共存在である）と考えることである。また人のみならず物もまた時間性を持っている。かつて存在した人々のつくった物が、現在の私たちと共に存在し、私たちの生を規定しているからである。3.11 はこの世代問題を再燃させた。それは世代の「複数性における世代的交流を支える基盤」としての世界が「失効」し、逆説的に世界について考えるきっかけを与えてくれたからである。

西山・渡名喜報告と森報告とはもちろん切り口が異なり、それゆえ別の話をしているようにも聞こえるが、そうではないと私は思う。なぜならば三者は、①3.11 が時間的に連続している日常世界を断絶させたこと、②したがって私たちは時間性ないし歴史性について考えざるをえないことを共通理解としているからである。そしてまた、3.11 をどのような歴史的文脈で〈記憶〉するのか、このことを共通の問題としているからである。

東京オリンピックが開催され、3.11 はますます単なる偶然的で不運な経験として捉えられ、すでに過去の出来事として忘却されようとしている。出来事を然るべき歴史的社会的文脈で理解し、未来への反省として共有すること、西山報告にもあったようにこれが人文学の役割に他ならない。